

Y6-10

東日本大震災における介護チームの編成と派遣について

日本赤十字社 事業局 救護・福祉部 広尾地区
介護保険施設等設置準備室
大橋 雪英、坂尻なつみ、市川 浩二

平成24年4月に東京渋谷区広尾に開設する日本赤十字社総合福祉センターは、特別養護老人ホーム、介護老人保健施設、認知症高齢者グループホーム、障害者施設等の事業展開をする。当該センターは、日本赤十字社の社会福祉施設の基幹センターとして位置づけ、研修会の開催、介護技術プログラムの開発など行い、他の施設へノウハウを提供する他、大規模災害時には、介護福祉の側から救護活動について中核的役割を果たすことも重要であることとし、新たな体制を整備することも予定している。3月11日に発災した東日本大震災では、広範囲にわたる避難所で多くの高齢者が見受けられ、特に要介護高齢者に対して、支援が必要であるとの意見を踏まえ、4月7日に本社災害対策本部内の特命班として、日本赤十字社として初めて介護業務に特化した「介護チーム」を全国14都府県の社会福祉施設、赤十字病院等の介護職員を中心に編成した。介護業務は常に常態化しており、一時の支援が継続されるよう、出口戦略を考慮した支援活動の選定を行った。「介護チーム」の支援活動は、第一に「施設支援」として、特養及び老健施設へ4月中旬からの1ヵ月間に岩手県陸前高田市で2施設、6月の1ヵ月間に岩手県上閉伊郡大槌町で2施設、合計4施設へ介護職員を派遣した。第二に「避難所等の支援」として、健康生活支援講習ボランティア指導員の参加を全国に求め、4人のボランティアがホットタオル、リラクゼーション、生活不活性化病を予防する活動等、災害時高齢者生活支援講習を避難所等で実施した。また、遠野市社会福祉協議会が運営するボランティア組織「遠野まごころネット」の足湯活動団体と協働して、入浴できない被災者の支援を展開した。さらに、医療救護班と連携した支援活動についても紹介したい。

Y6-11

東日本大震災におけるこころのケア活動の立ち上げ 石巻赤十字病院例

室蘭工業大学環境科学防災研究センター¹⁾、伊達赤十字病院²⁾、日本赤十字秋田看護大学大学院³⁾、日本赤十字社 医療センター⁴⁾
前田 潤^{1,2)}、齋藤 和樹³⁾、槇島 敏治^{1,4)}

【目的】東日本大震災では、石巻赤十字病院で心理学専門家をGMとしたこころのケア体制が敷かれた。本研究は、その初動体制を検証し赤十字こころのケア活動について検討する。

【日本赤十字のこころのケア】日赤のこころのケアは、IFRCやUNの国際機関におけるマニュアルやガイドラインを基礎とし、全ての被災者と支援者を対象とするストレス緩和活動である。

【石巻のニーズアセスメント】石巻赤十字病院は近隣の唯一稼働可能な病院として、医療救護活動を一丸となって取り仕切り、見事に差配していたが、病院職員は発災から過重労働に当たっており、多くが被災者であった。トリアージは緑か黒と両極に別れる傾向にあり、院内も避難所も物資不足が深刻だった。

以上の状況は、病院職員の休養体制の充実、ストレスマネジメント教育、物資などの基本サービスの充実が求められることを示し、石巻日赤にこころのケアセンターを置いて、こころのケア活動を展開することが必要と判断した。

【初動の体制と活動】そのため、まず

- 1 病院職員へのリフレッシュルーム設置、ストレスマネジメント支援を行った。
- 2 黒タッグ対応を行っていた石巻日赤の心理専門職員を、石巻こころのケアセンターのGMとした。
- 3 こころのケア班が避難所巡回する際、物資配布も行った。

【考察とまとめ】被災地の日赤拠点病院にこころのケア活動の拠点を置くことは、中長期的支援という観点からも重要で、今回はそれを担う職員にも恵まれていた。職員支援や負担の軽減を図ることは機動力と院外支援活動の充実につながる。物資の支援もこころのケア活動の一貫として行った。ストレス源の特定とその軽減を図ることは、日赤のこころのケア活動の基本である。